



かいこくへいだん
海国兵談 林子平著

寛政3年(1791)刊 16卷3冊

縦27.3cm 横18.5cm

林子平は、儒学者蒲生君平、勤王家高山彦九郎とともに寛政の三奇人と呼ばれた江戸時代後期の経世論(政治経済論)家。仙台藩士であった兄の元に身を寄せ、蝦夷、江戸、長崎などを遊歴し見聞を広めた。「赤蝦夷風説考」などを著した工藤平助に兄事し、桂川甫周、大槻玄沢ら蘭学者とも交流があった。

子平は、長崎遊学などによりロシア南下政策の情報を入手し、わが国の海防が緊急状態であることを説くため本書を著した。内容は、四方を海で囲まれた海国日本の防備は海戦を基本とするため、大船

建造、大砲の鑄造が必要であると論じ、幕府の政策を批判したもの。その中で子平は、「細かに思へば江戸の日本橋より唐、阿蘭陀迄境なしの水路也。然るを此に備へずして長崎にのみ備るは何ぞや」と特に江戸周辺沿岸の防備に對して警告している。

天明六年(一七八六)江戸にて全巻を書き終えた。仙台に帰り自ら版木を彫り、第一巻のみを天明八年に刊行。



「千部施行」の印が示す通り最初千部を印刷する予定

で予約を募ったが、危険を感じてか友人ら三十四人が応じたのみであった。結局、寛政三年に全十六巻を僅か三十八部自費出版したに止まった。

完成の喜びも束の間、子平は江戸へ召喚、町奉行の取り調べを受け、出版取締令違反で版木没取の上、仙台の兄の元で蟄居を命ぜられた。その境遇を「親もなし妻なし子なし板木なし金もなければ死にたくもなし」と詠い、自ら六無斎と号した。蟄居の中、寛政五年五十六歳で病没。

掲出書は、原刻三十八部の内の一部。現存極めて少ない。

(天理図書館 春木陽二)

天理図書館のお知らせ Tel:0743-63-9200 <http://www.tcl.gr.jp/>
平日(午前9時~午後5時半) 土・日・祝(午前9時~午後4時半)
ただし9月30日は休み
(本欄にて紹介した名品の閲覧については係へお尋ねください)